

チームで行う急性血液浄化

開催
日時

2023年 10月1日 日 12:00~
13:00

会場

第1会場 (ウインクあいち6F「604・605」)

司会

中田 孝明 先生 千葉大学大学院医学研究院 救急集中治療医学

演者

峰松 佑輔 先生 大阪大学医学部附属病院 臨床工学部
クリティカルケア領域における円滑な急性血液浄化の第一歩 ~多職種連携と腎チーム~

河合 佑亮 先生 藤田医科大学病院 看護部
チームで行う急性血液浄化 ~看護師の立場から~

- 本セミナーは整理券制(一部、当日配布)です。
- 学術集会事前参加登録時にWEBからのお申込みをお願いします。
- 詳細は学術集会ホームページにてご案内いたします。
- 事前登録期間：8月8日(火)~9月22日(金)正午

学術集会ホームページ
<http://jsbpcc34.umin.jp>



LS6-1

演
題

クリティカルケア領域における 円滑な急性血液浄化の第一歩 ～多職種連携と腎チーム～

演
者

峰松 佑輔 先生

大阪大学医学部附属病院 臨床工学部

当院の臨床工学技士の診療体制は、2014年の診療報酬改定以降、ICUの常駐化が進められた。ICUはClosed ICUとして運用しており、医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士が常駐し、必要に応じて理学療法士、管理栄養士が関わる。臨床工学技士は、平日日勤帯3名、夜間・休祭日は2名体制をとり24時間常駐しながら急性血液浄化、循環補助、人工呼吸器を中心に関わっている。

当院での血液浄化業務は、ICUや救命救急における急性血液浄化に加え、透析室における血液透析やアフェレシス療法など多岐にわたる。しかし、これまで治療の条件設定や施行方法、バスキュラーアクセスの取り扱い方など各部門異なっていた。近年、このような状況の中、医師の働き方改革の一環として臨床工学技士へのタスクシフト・シェアが注目され、当院でも透析室は全ての臨床工学技士が関わるように変更した。また、透析室では、これまでアフェレシスの条件設定や透析膜の選定、バスキュラーアクセスへの取り扱いなどに対応できる体制を構築してきた。これらの経験を活かし、院内における各種操作手技や装置を統一するとともに、デバイスやモダリティの変更など、標準化を図りながら安全で多様な患者に対応できるように取り組んでいる。

院内における急性血液浄化療法のほとんどがAKIに対するCKRTである。しかし、CKRTを遅延なく円滑に実施するには、全身管理、薬剤、治療準備、ルート確保など医師1人では難しい。そこでICUに多職種からなる「腎チーム」を結成し活動を開始した。具体的には、CKRTのマネージメントに関することから活動をはじめている。

腎チームのある病院は全国的にもまだ少ない。本共催セミナーでは、当院の多職種連携における臨床工学技士の取り組みを中心に紹介する。

LS6-2

演
題

チームで行う急性血液浄化 ～看護師の立場から～

演
者

河合 佑亮 先生

藤田医科大学病院 看護部

日本のDPCデータベースによると、ICUにおいて初回に施行される急性血液浄化療法の約8割が持続腎代替療法(Continuous Kidney Replacement Therapy: CKRT)であり、重症度が高い患者ほど高い割合でCKRTを施行されていることが報告されている。CKRTはその名とは異なり、腎を完全に代替する治療法ではなく、正確には人工腎補助療法(Artificial Kidney Support Therapy: AKST)と呼称すべきなのかもしれない。実際に体液量の調整に関しては腎とは異なり、除水設定に盲従して水分を引き続けることに留意する必要がある。酸塩基平衡と電解質バランスの調整に関しても腎とは異なり、生体に必要な物質を再吸収する機能が備わっていないため、廃液流量(濾過液流量+透析液流量)の増減に応じて、目的の電解質等は補正されたか、目的外の電解質等に逸脱はないかを観察することが必要である。また、合併症として特に出血や血栓に注意し、抗凝固・血液データの管理を徹底するとともに、観察を頻繁に実施していくことも不可欠である。CKRT施行患者は不安定な状態にあることのみならず、持続的な体外循環や長期間の不動化等に伴う様々な合併症をきたしやすいため、安全かつ効果的なCKRTの管理はもとより、早期離床・リハビリテーションを含めた集中治療後症候群(Post Intensive Care Syndrome: PICS)に対するケアをチームで協働して提供していくことが重要である。看護師は24時間切れ目のないベッドサイドでの観察とケアの提供を通して、患者と多職種を繋ぐ役割を担うことができる。本セミナーでは、チームで行う急性血液浄化について、自施設の実践を含めて看護師の立場から考えていきたい。

